

祭りやイベントを彩る竹製照明の制作、演出を手がける南関町の「ちかけんプロダクツ」(ちかけん)が国内外に活躍の場を広げている。さまざまな模様を加工した竹に明かりをともし、幻想的な空間をつくり出す仕掛け。代表の三城賢士さん(39)は「日本の新しい文化として、根付かせたい」と力を込める。

制作、演出

「ちかけん」(南関町)

ちかけんは、三城さんと崇城(大熊本市西区)の同級生だった池田親生さん39が2007年に起業し、12年に株式会社化した。当初は発注依頼が少なく、「お金がない状況が続いた」(三

クローズアップ

城さん)。10年を経た現在は、自治体や企業、団体から年間約150件の引き合いがあり、認知度は高まった。転機は16年の熊本地震だった。2人は災害ボランティア団体「熊本支援チーム」を立ち上げ、県外ボランティアの拠点運営や支援物資の管理などを担った。30社以上の企業や団体と連携して復興を後押ししながら人を広げた。県内ではこれまで、熊本市の秋の風物詩「暮らしまつり

竹あかり「根付かせたい」

熊本城の「城あかり」で披露されたちかけんの竹あかり＝昨年11月(いづれもちかけん提供)



熊本地震で復興後押し 活躍の場 国内外へ

知人の紹介や交流サイト(SNS)による情報発信をきっかけに、台湾やブラジルなど6カ国・地域に事業を展開している。18年には、中国浙江省安吉県の祭りに向けて月1回現地でワークショップを開き、地元住民約500人を手ほどき。現地の竹約4万本で作った竹あかりは好評を得た。三城さんは「中国には机や椅子などの日用品を作る竹文化は発展しているが、照明として使う風習はなく、教えがいがあった」と手こたえを感じた。

現在、南関町のホテルセキアの一角に構えた工場で、社員とアルバイトの約10人が次のイベントに向けた作業を急ピッチで進める。「全国都市緑化フェア(くまもと花博)」の一環で、5月7～22日に熊本城長堀沿いを筒やまり型の竹あかりで彩る。工場長の中村友哉さん(36)は「PRできる好機。多くの人たちを喜ばせたい」と張り切っている。(田中慎太郎)



中国で竹あかりの作り方を地元住民に指導する三城賢士さん(右手前)